

# 19世紀中葉の英国におけるウェスレー派 メソヂイズムの教育政策と民衆学校教育について(3)

——50年代までの教員養成問題を中心に(下)——

青木秀雄

## 目次

はじめに

I. 教員養成機関の創設

II. グラスゴー方式の採用

付記(ここまでが上)

III. ウェストミンスター師範学校の教育内容

IV. J・スコットとその教育観

おわりに

## III ウェストミンスター師範学校の教育内容

ウェストミンスター師範学校における教員養成の方針と入学資格条件が、「その原理・原則」として創設時に下記のように示されている。<sup>1)</sup>

1. 週日学校は、世俗教授と共に宗教教授を保障するために設置されるのであって、すべての学校は宗教を基盤とすること。
2. 教師は学校であり、学校は教師であるといわれるように、教師の人格と資質が重要であること。
3. 養成学校は、上記1. 2. の原理に基づいて、教師に相応しい個性と人格を養う。それ故、学校での生活の基本は誠実さである。知識やその理解よりも、誠実で几帳面に本分を尽すことと、これに直結した道徳的規律が重要であること。

以上の三つの原理に従い、入学資格者を次のような観点より選ぶものとする。

- (1) 宗教的人格の形成に影響を与えた宗教的経験を充分体験していること。
- (2) 下記の試験科目により、入学するに十分な知識があると認められたもの。  
基礎神学・聖書の歴史・英国史・地理・英文法・算数・音楽・賛美歌の指揮法。
- (3) 健康であって身体的障害のないこと。

以上のことから、同師範学校は、先ず宗派教育を第1目的としていること、そしてそのためには、その教師に相応しい宗教的人格の形成が重要であるとしていることが分かる。拙論(上)において指摘したように、同派が教師の宗教的・道徳的資質と、それが生徒に与える影響力の重要性を認識していたことと、ストウがグラスゴー方式においてそれを充分考慮し展開していたところに両者の大きな一致点があったのであり、ここではこのことを一歩進めて、宗派教授を師範学校の基盤とする道が開かれたのである。

### 寄宿学生の日課と学習

「誠実で几帳面に本分を尽くす」ことが期待されされた日課はどのようなものであったのか。J・スコットの後、第2代目の同校校長は、1868年から1903年まで35年間ずっとJ・

H・Rigg (James Harrison Rigg, 1821—1909) であったが、1880年代の学校規則が残っているため、当時の日課と生徒委員規則は下記のようなものであったと推察できる。<sup>2)</sup>

- 6:00 起床
- 6:30 自習室 (day-rooms) に集合し自学自習
- 7:30 寝室の清掃, 身の回りの片づけなど (それが終了すれば, 各自自由)
- 8:00 食堂にての朝食と家庭礼拝
- 9:00 授業 (欠席の場合は必ず副校長より許可を得ること)
- 13:00 昼食 (正餐 dinner)
- 13:30 散歩, fives (球戯) など, 寝室にて30分間休息許可 (17:00の夕食後の30分間, 日中は2回のみ寝室に戻る)
- 15:00 授業
- 17:00 朝食同様の簡単な夕食 (tea)
- 18:30 自習室にて自学自習
- 20:45 お夜食 (パン, チーズ・ミルク)
- 21:00 夜の礼拝式
- 20:20 消燈 (22:00までに寝室に戻る)

生徒の中から次の4つの役 (officers) が指名される。

1. 出欠席調役 (a Censor) 1名
2. 自習室監督役 (Curators) 4名
3. 先詠・図書役 (a Precentor and Librarian) 1名は家庭礼拝のときの賛美歌と図書管理をする
4. モニター役 2名 (他の3つの役は1年間継続されるが, これは週毎に寝室毎に指名され, 日課の鐘叩きとガス灯の管理をする)

以上のような勤勉な日程が課され, 毎日6時間の授業と3時間余の自習時間が設けられている。

この日課は, 前述の教育方針に則って, 次のように運用されていた。<sup>3)</sup>

学校での規律と訓練は, 宗教的人格を養うことにある。宗教の学習は, 宗教的感性と習慣によって成り立つので, 学校内での生活において, すべての教師と学生はこれに専心すること。したがって, 朝夕の礼拝式は全学生の義務であって, 賛美歌と礼拝, 聖書の読会と研究を行う。毎週1回, 校長またはその代理によって, 学生個人の宗教的心況に関する課題についての対話が求められ, 訓戒や助言が与えられる。毎日曜日の朝は, 早朝礼拝式の後, またその他機会をつくって, 男女別々の教室で, 聖書と聖霊に基づいた教授と学習を行う。また, 歴史・地理・聖書史などの関連教科目においても宗派教育が行われること, と示されている。

聖書の読会・研究とその教授・学習形態は, クラス・ミーティングの形式に倣っていたと考えられる。

#### 世俗的教科目とその教授

一般的な初等学校 (primary or elementary schools) の日課である世俗的知識の学科

目 (branches) について充分修得すること、とあり、世俗教授の課程 (course) には下記学科目が置かれ教科書が用いられた。

読み方	M'Culloch 著 “Course of Reading” によって、主に読本の技術を語源学も交えて教授する。
英文法	英語の語源と統語法を交えて文法を教授する。教科書は、Christian Knowledge Society 出版の “An English Grammar” と Latham 著 “English Grammar”。
作文	作文は、年間を通して実践的な指導をする。(教科書は用いない。)
算数と簿記	Melrose 著 “Arithmetic”, De Morgan 著 “Principles of Arithmetic”, Irish Board 著 “Elements of Book Keeping”
英国史	Chambers' Educational Cours の “History of the British Empire”
地理	地理学はますます重要性が増しているため、先進諸国の政治地理学や地学など広範にわたって教授する。 Reid 著 “Rudiments of General Geography” と Sullivan 著 “Geography Generalized”
学級経営	一般的にウェスレー派各校において用いられている D・ストウの “the Training System of David Stow, Esq. of Glasgow” を中心に、その原理と方法を教授する。学校管理、学校の設備や今日までの教育実践についての経験にも触れる。同じく D・ストウ著 “The Glasgow Trainer's Record”
代数	2つのクラスに分け、上級は Colenson 著 “Algebra”, 下級は Tate 著 “Algebra made Easy” を用いる。
幾何・測量・求積法	2クラスで、上級は Potts 著学校用 “Euclid” の第II～VI巻と Irish Board 著 “Treatise on Mensuration”, 下級は “Euclid” の第I～III巻
力学 (機械)	上記上級クラスにこの教科目を置き、Tate 著 “Exercises in Mechanics” を教科書とし、その “Simple Machines” の章を教授する。
基礎物理	M'Culloch 著 “Course of Physical Science”
歴史	男子学生対象、Tytler 著 “Elements of General History” により古代の章を教授する。
英語史・語源学	Chamber 著 “English Literature” Latham 著 “English Grammar”
ラテン語	最上級学年後半に、その基本的知識をもつ学生に指導する。
製図・線画	黒板の線描、描画を重点に指導する。政府発行の Butler Williams 著 “Manual of Drawing”
音楽	音楽は聖歌と世俗のもの共に重要であり、学校の日課に潤を与える。ウェスレー派の賛美歌集や世俗的曲目を練習する。枢密院教育委員会承認の Hullah 著 “Manual of Singing”

以上の教科目と内容を、1854年の英国教会系師範学校における女王奨学生制度に則った視学官による試験科目と比較すると、殆ど同じものとなっている。<sup>4)</sup>後述するように、経営資金の不足する同派にとって、女王奨学生に合格する学生を多くし、国庫補助を得ることは重要であった。また、教科書は、製図・線画や音楽を初め政府推奨のものを多く使用していた。以上のように、密院教育委員会のカリキュラム政策に同校が同調している様子が窺える。

教育実習は、付属の各実習校において、担当教師の監督の下に毎週一定時間、すべての教科目について行われる。また、実習生の全員に、週一度大教室での研究授業が課される。その授業には、教頭と担当の教師および全実習生が参観すること。その後、講義室にてその実習授業についての研究会を設ける。

教育実習の総仕上げとして、最終学期の一定期間模範学校において実習し、一般の週日学校における初等教育に関する実際例に触れ、どのように経営されているかを学ぶ。特に、その地域に唯一の学校しかない、村や小さな町の、男女の異なる年齢の児童がいる場合について、どのようにクラス分けし経営するかについて実習すること。<sup>5)</sup>多くの初歩学校がこのように小規模であったのでこれが重視されたのである。

学級経営の教科書にストウのものが用いられ、グラスゴー方式の教育法が実践的に指導されていたことが分かる。グラスゴー師範学校のカリキュラムでは、週40時間の授業の中で、16時間がアカデミックな学習－物理、自然史、地理学、算数と代数、英文法、聖書史、発声法、雄弁術、音楽、絵画、体操に当てられた。教職科目としては、(1)模範大クラス(model schools)の参観に8時間、(2)階段席のある大教室(gallery)とクラス(グループ)単位の実習に11時間半、(3)選択性の聖書の授業1時間、(4)公開批評授業(public criticism lessons)3時間半となっている。<sup>6)</sup>また、ウエストミンスター師範学校の中心となった教師達はグラスゴー師範学校の卒業生であった。

1841年、グラスゴー師範学校第1回派遣組6名中の1人、William Sugden, B.A.は、卒業後Holmfirthにある学校に赴任したが、グラスゴーへの留学生が増加するにつれてその監督者が必要となり、彼が同師範学校の上级小学校の教師を兼ねその目的のために再びグラスゴーへ赴いた。その6年後、前号にて触れたように、50年の模範学校設立に伴いウエストミンスター校に呼び戻され、翌年、範学校設立と同時にその初代教頭となり、81年亡くなるまでの30年余、初代校長のスコットと2代目のJ. H. リッグに30年余仕え同師範学校の教育を支えた。同じく6人組の1人であったEdmund J. Westは、Burslemの学校に赴任した後、ウエストミンスターの下級実習学校が設立されると、初代教頭として呼ばれ、翌年師範学校の音楽講師となっている。また、上級実習学校初代の教頭、J. Louis Kinton B.A.もグラスゴー留学生であって、後に最初の年間100ポンドの国庫補助金獲得師範学校講師の一人となった。<sup>7)</sup>グラスゴー方式の教育法が、如何にウエストミンスター校に多大な影響を与えていたかが窺われる。

#### 女王奨学生および教師資格試験

1840年に締結され、1870年まで効力をもった英国教会と枢密院教育委員会との協約では、管轄の大主教は、国民協会と英国教会各校における適任の勅任視学官候補者を推薦することができ、不適任者に対しては解任することができた。<sup>8)</sup>また、大主教は、宗教教授の査察

に関して、国民協会系と英国教会担当視学官に指針を出し、しかも世俗教授の査察に関する一般指示も出すことができたのである。ウェスレー派は、カソリックと時を同じくして47年4月、国庫補助の交付を受けることを決定したが、視学官の任命に関する事前協議と査察内容については、43年より英国教会同様となっていた内外学校協会に倣い認められていた。しかし、視学官の推薦解認等の権利は、内外学校協会同様認められていなかった。<sup>9)</sup> 英国教会系民衆学校は優遇されており、差別されていた。

46年体制に組み込まれた同派は、その教員見習制度に基づき各民衆学校が運営されていたといえる。教員見習生 (pupil-teachers) は、国庫補助対象の初等学校における5年間の年期勤めの後、女王奨学金を得て教員養成校に入学するための試験を受ける。試験準備のため、その秋には師範学校の講義の一部と読本の集中授業を受けた。女王奨学生として合格した生徒は、翌年の1月に入学することになる。<sup>10)</sup>

開校初年度の授業が終了した52年12月14日から5日間、ウェスレー派等担当の視学官 J. D. Morell, Esq. の視察とクリスマス試験が実施された。同師範学校で1年もしくはそれ以上学んだ38名の学生の教師資格と、数名の特別増棒教員資格を目指す(師範出身でない)現職教員、および女王奨学生を目指す10名の教員見習生達が受験した。また、その5日間の毎日午後には、同視学官立会いにより、実習学校の大教室で授業実習が行われた。以下は枢密院教育委員会によって準備された試験科目(午前午後3時間ずつの試験時間)の日程表である。<sup>11)</sup>

	男性	女性
14日(火)	午後 算数・簿記	算数・(ウェールズ語を選択で含む)
15日(水)	午前 英国史	英国史
	午後 ユークリッド・測量・求積法	地理・博物学
16日(木)	午前 代数・高等数学	教授技術・学級経営
	午後 英文法・英語・英文学	英文法・英語・英文学
17日(金)	午前 地理・一般天文学	家庭科 (domestic economy)
	午後 音楽・語学 (ギリシャ・ラテン・ウェールズ語)	音楽・語学 (ウェールズ語)
18日(土)	午前 学級経営	裁縫
	午後 物理・(農業問題を選択で含む)	
20日(月)	午前	授産学校における大教室での教育実習

なお、枢密院教育委員会に要望され、ウェスレー派教育委員会が用意した宗教に関する追加の論文試験が、20日の夕方と21日の朝方実施され、視学官に提出された。

- 20日(月)夕 I 啓示宗教の黙示的証拠について  
 II 聖書の歴史について  
 21日(火)朝 III 聖書の教理について

#### IV 学校教育（教師は如何に道徳的・宗教的影響力をもつか。教師にとって不可欠な資質とは何か。何故教師は両親と協力しなければならないか、など）について

枢密院教育委員会の発表によると、この試験結果の評価は大変高いものであった。10名の女王奨学生受験者は全員合格した。師範卒でない2名の教員が、特別増俸資格教師に合格した。38名の学生の中で、半数余の20名が教師資格を有する教師として、35名が卒業して各地方の初等学校の教員となった。<sup>12)</sup>

このクリスマス試験は、同師範学校のカリキュラムに沿った内容となっており、前述した1854年の英国教会系師範学校に対する試験科目と対比すると、宗教科目以外は殆ど類似している。以上のことから、視学官を通じての国家による同師範学校への教育内容に対する影響力が多であったことは明らかである。しかしながらウェスレー派にとって、国庫補助金は文字通り有難かったし、その干渉内容に対しても好感をもって対応していたといえよう。同派教育委員会『年報』の表現において、このことが充分窺れる。以後、前述の試験合格者一覧が毎年掲載された。枢密院教育委員会が用意した試験に、同派が如何に積極的に取り組んだかが如実に現われている。また前号でも触れたように、枢密院教育委員会も、M. アーノルドに代表されるように少なからず好感を抱いていたことが窺える。両者は相互依存の良好な関係にあったといえよう。

#### IV J・スコットとその教育観

前号（上）において、ウェストミンスター師範学校設立の第1の推進役であり、初代校長としてリーダーシップを発揮したJ・スコットと彼の教育観が、やはりグラスゴー方式採用における最大の理由であることを示唆した。

スコットの教育に関する著作はない。そこで、彼の教育思想を考察するには、1854年の1月より毎年ウェストミンスター師範学校の卒業式に際して行われた講演録に依拠する他不是はない。その講演は、亡くなる前年までに14回行われた。小論では、その中の1855年とその翌年の講演を主な資料とし、彼の目指した教師像を中心に教育観を考察する。<sup>13)</sup>

##### 伝記

J・スコットは伝記らしきものを残さなかった。彼の死を報じた新聞“The Christian Times, 1868年3月21日号”によると、彼の生立ちは次のようなものである。

1792年8月17日、ヨーク市近郊のCopmanthorpe村の農家に生まれた。彼の教育歴は、3R'sの教育をその村の学校で受けただけであった。しかし、幼少より母親につれられて、ウェスレー派のクラス・ミーティングによく通った。11才になったとき、信徒として同派の「会」(Wesleyan Society)に入会している。彼は地方説教者(local preacher)としての教育を受け、その資質を試すに不可欠な厳しい試練の後、20才の1811年、Hull巡回区(circuite)の説教者となった。

彼への天恵とも思えることは、そこでの一年間、当時既に著名で（後に1826年の年会議長に選出された）Richard Watsonの家に寄宿でき、またその後の数ヶ月、（30年代を中心に一代を築いた）J・バンティング(Dr. Jabez Bunting)<sup>14)</sup>の家に住んだことである。しかし、この2人の偉大な説教者が、彼の人格に多大な影響を与えたとは言い切れない。

Hull 巡回区に継いで、Hammersmith, Colchester, London, Rochester の巡回区へと転籍した。この間、ロンドン滞在中の1822年12月、(ジェントルマン階級である) Esquire の Henry Walker の只一人の令嬢と結婚している。リバプール、マンチェスター、ブリストルよりロンドンに着任し、終生この地に留まった。

1833年に(同組織の中枢である)ハンドレッド (Leagal Hundred) に、(奇しくも、スコットと同年生まれで、年会議長を彼同様2回経験し、彼の前年逝った) J・ハナ(Dr. John Hannah, 1792-1867) と共に選出された。スコットは、1843年と52年の2回、最高の栄誉である年会議長に選ばれている。

彼は当初より初等教育の重要性を痛感しており、宗教教育を保障するためには、宗派による教育制度が不可欠であると考えていた。43年以降、週日学校の急速な普及による教師不足問題に直面し、同派教育委員会議長として奔走し、51年、ウエストミンスター師範学校設立まで漕ぎ着け、その初代校長に推された。

その後、同師範学校校長として、また説教者として活躍し、1868年正月10日急逝、享年75才。

彼はすぐれてバランス感覚に満ち、本来の意味での常識と理念を保持しながら、しかも現実の状況に即し適応する資質をもっていた。<sup>15)</sup>

スコットは、同師範学校校長となった当初より、毎年学生に講演することを計画していたが、53年までは体調が勝れず実現できなかったようである。<sup>16)</sup>

### 世俗教育と教授法

科学は、自然について説明してくれるが、人生如何に生きるべきかの真理は教えてくれない。知識は力なり、といわれるが、単なる知識は、どの道が善であり何が悪であるかを決定してはくれない。効果的な方向や方法について明確に示すことができるだけである。

何が正しく、何が彼自身と社会にとって有益であるかを判断する知恵が必要となる。そこで、知性以上の教育として、趣味や好みは洗練され上品になることと、倫理学(moral science)が推奨される。「趣味や好みに依存する想像力や感情も養われべきであって、物の形態の美を見る目が肥え、ハーモニーに満ちた音を聞き分け楽しむ耳が養われなければなりません。」したがって、音楽、詩歌、美術、自然観察などに親しませなければならない。しかし、「洗練された趣味」というものは、道徳を完全に保障するものではない。「優れた芸術家が純粋な心を持ち、品行方正であるとは限らないのです。」<sup>17)</sup>

知性(intellectual powers)を重視する人々がいる一方、「現実の社会的存在である人間にとって、倫理学を教授し、美德を教え込むことがより重要であると考える人々もおります。道徳的習慣は、個人にとって名誉であり、彼の幸福に都合よく、また社会にとっては悪徳の習慣よりはるかに益がると考えるからです。」<sup>18)</sup>

現世的な、知識・知性、感情・品性、倫理・道徳三者の関係が平行的に説かれ、次いで道徳教育の本質論へと導入される。

自然科学の目的は、何であるかという疑問に答えることであるが、倫理学(moral science)の目的は、何を為したらよいか(What ought to be?)に答えることである。倫理学(moral philosophy)は、人間としての義務と分別を教える学問(science)である。しかしながら、人は何を為すべきか(What should do?)を子どもが判断できるようにするために、教師は何を基準に指導できるのであろうか。アリストテレス以来、聖書を持たない倫理学者(moral philosophers)の最大の難問である。何が徳であるか。ある行為が正しいのは、是認されて

いるからなのか。行為の功利性が、道徳的質を決定するのか。卒業後、つまり教師の権威がなくなって後、自由になった子どもたちは何に道徳的依り所を求めればよいのか。「民衆教育の一部の唱導者は、啓蒙と自由を主張し、その教育を公的に制限すべきであるとしています。つまり、聖書は、地理や歴史として教えるだけで、その教義や道徳についての教化は師範学校では許されないと言うのです。倫理学 (ethics) のみ公教育において教授されべきであるとの論です。」

このように世俗主義者や功利主義者等を批判し、ウェスレー派の学校は「自由主義者」に組みするものではないとして、倫理学の限界が説かれ、後述するように、真の道徳教育のためには、宗教教育が不可欠であることが強調される。<sup>19)</sup>「世俗的知識の教育は、現世に住む限り、就職にとって有効でしょう。しかし同時に、宗教教育を施さなければなりません。彼等は来世にも生き続けなければならないのですから。」<sup>20)</sup>

「教師は、いわば正しく生徒であり、しかも教育者としての適切な能力をもった者です。」しかし、それだけでは良い教師とは言えない。授業に対する日頃の準備が習慣化することが大切である。

「どのような知識に関する授業であれ、教材が集められ、それに対する考えがまとめられなければなりません。すなわち、適切な言葉と語句が精選され、散漫で矛盾した考えや、理解を伴わない言葉 (words without knowledge) を排除し、簡潔にして深い意味を把握した表現でなければなりません。」

自分の既得知識に自信があり授業準備をしない教師は、実は彼が意識しているほどには知識がなく、結局は授業が筋の通るようには展開できないものである。したがって、「教師自信にとって、また生徒にとっても興味ある授業とはならないのです。」<sup>21)</sup>

授業の準備と、興味を喚起する授業展開が重要であることが指摘されている。

幼児学校 (Infant-schools) では、子どもたちがよく知っている内容の絵を見せ、そこに描かれている人物や事物についての言葉や歴史などが説明され「様々なテーマについて、思い出し、もしくは考え出されるよう、教師は問いかけます。その問いは、子どもの年齢と能力に応じて、しかも彼等の興味をそそるように行われます。」

体育の行進や唱歌などは、幼児学校の教育の一番良いところである。教科書の読み方は指導されるが、必ずしも義務づける必要はない。また、「狭い教室にずっと閉じ込められているような教育環境よりも、良い空気のある戸外で体育を大いに取り入れるべきである。<sup>22)</sup>ここにもグラスゴー方式の影響が色濃く映っている。

#### 宗教教育

倫理学者にとっては、「もう一つの世界の条件、つまり人間の霊的な本質 (spiritual nature) である全能の神との関係とその本分 (his duties) については全く考慮していないのです。」聖書の教えにあるように、規則や徳の動機とは関係なしに道徳 (moral science) を教え、道徳的義務を教え込むべきである。<sup>23)</sup>

「学生諸君は道徳の根本を身につけています。諸君の良心は至高の玉座へと導かれています。神と法によるだけでなく、興味・情熱・愛情や意志に則って、その教養ある心を支配して下さい。内なる自然と外なる生活を統治するために、今日まで養われた諸君の良心は、形而上学における倫理学の方法によるものではなく、〈中略〉神の言葉がその原理・原則に先立つものです。加えて、神への畏れ、すなわち知恵の始まりであり悪を憎むことを学び、〈中略〉神の目によって、人間性とその行為における正邪の判断が絶対に誤りなきも



のであることを教えられ、経験してきました。」<sup>24)</sup>

学生諸君は、これからは教師として教授 (instruction) に心がけるだけでなく、「生徒を感化 (influence)」しなければならない。「感化というのは、行動に対して長く働きかけるものなので、思考、感情や行為における悪い習慣がつく前に、人はよく感化されなければならないのです。」諸君は、この崇高な教育の目的の達成、すなわち「生徒の精神と人格を天与の模範に従って形成することを希望します。」

しかし、諸君が「優れた模範を常に示せるとは限りません。」それ故「これからも注意深く人格の陶冶 (the mould in which it shall be cast) に心がけ、永遠の人格を刻印される死の準備をすべきです。」諸君の指導によって生徒の完全な人格の形成過程を用意するには、多大な困難と限界がある。したがって、キリストが正に「そこに神の国がある」と説いているように諸君が生徒に対するとき、その達成の大いなる望みが神より下されるのである。「諸君が教室に向かうとき、常にそのキリストの言葉を思い出して下さい。そして、神の真理を教え、一人ひとりを神に従う者となるよう導き、彼等が救世主であり主であるキリストを受け入れられるようにすること」の尊さと重要性を常に心すべきである。<sup>25)</sup> 道徳教育を含む世俗教育を統べる宗教教育について、同派の見解がスコットにより具体的に述べられている。

#### 児童・生徒愛と教師像

幼児学校の教師には女性が適している。女性であるが故に、自然にその長所をもっている。「想像力、感情、機敏さ、穏やかな優しさ、根気、情熱の点で男性より優れていると考えます。したがって、女性で、教養があり教育技術に優れ、幼児への温かな思いやりをもち健康であるならば、常に最高の幼児学校の教師となるに違いありません。」<sup>26)</sup> また、たとえ教師としての教育は受けていなくとも、幼児に対するやさしさと宗教的配慮をもつ女性ならば、師範学校を卒業したが、「幼児への関心がなく、真の教育方法を身につけていない教師」よりもずっと良い影響を与える、とまで言い切っている。<sup>27)</sup>

幼児学校であれ、下級、上級学校であれ、下位の到達目標に満足しないで、より質の高い教育実践を目指して欲しい。「子どもたちは貧しく、親も貧しいでしょう。しかし、そのように貧しい子どもたちの福祉に愛情深くやさしい関心をもつよう努めて下さい。〈中略〉子どもたちの能力がどうであれ、愛情をもって、諸君のできることをしてやって下さい。」親切心・深い愛情、精励を決して忘れないように印象づけることが大切である。<sup>28)</sup> Kay 同様に、民衆教育に当たる教師の、貧しい子どもたちに対する理解と愛情、また感化の重要性がこのように強調されている。

「芽を出しかけている能力や感情をもつ子どもの本性を真に理解すること」と「子どもに対する心からの愛情と彼等が求めている興味関心に対する共感」が何よりも重要である。<sup>29)</sup>

「教師の気質が教室で有害に作用することがあります。」ある視学官の報告によれば、児童の顔をよく観察すれば直ぐ分かるという。活気なく憂鬱な顔つきをしていて、教師の質問に俯いて視線を逸す。正しく答えるときも、表情は明るくない。「恐怖の感情が習慣化して、決して親切で楽しくもない服従が、生徒の表情に描かれているのです。それは陰気で無関心ではあるが、断固たる反抗的沈黙をもった人相の悪さ」を表現している。この引用はウェスレー派の学校に関する報告ではない。このような教師の気質の欠陥について指摘されたことは一度もないが、他の宗派の学校ではよくあるようである。

「もし教師がしばしば生徒を怒ったり、教師自身の怒りっぽさや指導力の不足に直接の

原因があるのに、それを生徒に転嫁するならば、また教師が暴力的な規律に頼り、体罰に依存するならば、生徒の愛情は獲得できません。それよりも、心と心によって、野生のような激情を抑制する、確固たる権威である理性に基づいて児童の心に及ぼす感化に頼るべきなのです。このことは、諸君がこの学校で体験してきたことですから何の疑問もないと思います。〈中略〉またこれとは反対に、放任過ぎる気質 (over-easy temper) は、よき規律と向上心に対して、荒々しさや厳格さと同様致命的です。教師の親切、個人的世話や慈愛の深さの結果、生徒は教師に愛着を感じるようになるのです。決して権力からではなく、秩序によりその環境が維持されることを、生徒は好むと信じます。』<sup>30)</sup>教師と生徒の信頼関係に基づく学級経営の重要性が以上のように指摘されている。一視学官が「真の学校教師こそが学校なのである」と表現したように、学校教育の成否の鍵を握っているのは教師である、というのが視学官の一致した見解であったこと<sup>31)</sup>に彼の教育理念は対応し、その宗教・道徳的人格が重視されているといえよう。

「最低限必要なルールのみ、本校では公示してあります。それは諸君一人ひとりが、自分自身の法律であるべきであると期待するからです。自治の尊重が、本校の全ての人々の習慣となることを希望するのです。<sup>32)</sup>スコットの死を悼んだ同派教育委員会『議事録』に、「彼自身常に誠実に規律を尊重していたが、外からの権力による圧力でというよりは、常に好んで、良心を啓発する内心の力によって規律が保たれる」ように努めたとある。<sup>33)</sup>如何に彼が自律心を重視したかが窺れる。

彼は本質的に実践的な人間性に富んでいた。校長としての彼は、この独裁的個人主義の時代に、支配や恐怖よりも、相互信頼と尊敬の規律を重視した。如才なく、もの柔らかで、同僚であろうと生徒、政治家であろうと、全ての者に親切であった。全ての行為が深く静かで、一貫した敬虔に裏付けられていた。<sup>34)</sup>英国の偉大な精神、compromise (妥協) の持主であると同時に、宗教的人格者として人々より尊敬されていたのである。

視学官M・アーノルド (Arnold) が、ウエストミンスター師範学校における教員試験試験 (クリスマス試験) の監督をしていたとき、枢密院教育委員会の委員長F・サンドフォード卿 (Sir Francis Sandford) が突然訪れ、アーノルドが受験生に背を向けて忙しく書き物をしているところを見咎めた。同卿は丁重に、背中で受験生を監視することは不可能であると諭した。アーノルドいわく「格下、それは全く必要ないことです。ウエストミンスター校の者は、誰一人監督する必要がございませんので。」<sup>35)</sup>このエピソードは、同校の目指す道徳的人間形成の遂行情況を端的に示唆している。

## おわりに

ウェスレー派の目指した、宗教的・道徳的人格を重視する教師像は、「師範学校の主目的は、学校教員の性格形成」<sup>36)</sup>にあるとしたKayの主張と重なることを、また同派師範学校が、枢密院の用意する資格試験等により、如何にその教育内容に干渉できたかについて具に検証した。すなわち、「キリスト教的慈善心」を基礎とする道徳的性格を形成するというKayの目標は、<sup>37)</sup>基本においてウェスレー派のものと同じであったし、同派もこのことによって支障はなかったといえよう。

“The Encyclopedia of World Methodism”によると、スコットは「19世紀におけるウェスレー派メソヂスト教育家の重鎮」である。しかし「1846年から70年にかけての民衆初歩教育運動 (voluntary education movement) に対する同派の不参加については、彼

に大きな責任がある」と明記されている。果して、この指摘は適当であろうか。同派の宗派教育重視の教育政策と、世俗教育台頭の風潮のジレンマの渦中であって、民衆初歩教育運動への積極的参加へと転換した、同派47年の教育政策を推進したスコットのリーダーシップについては、拙論(2)において既に究明した。小論では、その後の彼の同派民衆教育のための教員養成理念と実践を中心に考察したが、モニトリアル・システムのような機械的教育論の時代であって、彼の民衆教育に対する理解と情熱、またその造詣の深さを明らかにした。宗派教育をその中心に据えた彼の教育観は、改政教育令以前の枢密院の教育政策に妥協して、民衆教育運動をむしろ積極的に推進したといえよう。

#### 註

- 1) The 13<sup>th</sup> Annual Report of the Wesleyan Committee of Education 1852. London, 1853, PP.17-25.
- 2) Pritchard, F.C.; The Story of Westminster College 1851-1951. London, Epworth Press, 1951, PP.70-1, 204-5.
- 3) The 13<sup>th</sup> Annual Report. op.cit., PP.25-32.
- 4) 三好信浩「イギリス公教育の歴史的構造」垂紀書房, 1968, PP.325-6, および大田直子「イギリス近代公教育制度の成立過程を巡る分析(2)－1862年改正教育令以前の教育政策」帝京大学文学部『帝京国際文化』第7巻, 1994.2に示されている教科目参照。
- 5) The 13<sup>th</sup> Annual Report. op.cit.,pp.33-4.
- 6) Birchenough, Charles ; History of Elementary Education in England and Wales from 1800 to the Present Day. London, University Tutorial Press, Third Ed. 1938, PP.363-4.
- 7) Pritchard, F.C. ; op.cit., PP.23-4,7.
- 8) Minutes of the Committee of Council on Education 1839-40, London, 1840, P.21.
- 9) Muphy, James ; The Education Act 1870. Text and Commentary. Devon, Newton Abbot, 1972, P.21. (Minutes of the Committee of Council on Education 1846, London, 1847, Vol. I, PP.17-20,24)
- 10) Pritchard, F.C.; op. cit., P.20.
- 11) The 13<sup>th</sup> Annual Report. op.cit., PP.35-6, 128-61.
- 12) ibid., PP37-9.
- 13) Scott, J.; Addresses to the Students in the Wesleyan Training Institution, Westminster. London, Westminster Training College, 1869.は、J・スコットの一周忌に因んで、卒業講演の全てを蒐集し出版されたものである。なお、同講演は、Annual Report of the Wesleyan Committee of EducationのAppendixに収録されており、この出版に際して講演題目が付記されたものと考えられる。
- 14) バンティングの教育政策については、拙論「英国民衆教育展開についての一考察－19世紀前半のメソディスト派を中心として」岡田正章編『教育の真理と探究』明星大学出版部, 1993, PP.313-34.参照。
- 15) 以上同死亡記事によるが、( )内は筆者加筆。
- 16) Pritchard, F.C. ; op.cit., 9.30.
- 17) Scott, J.; 'Schools and Teachers' Addresses to the Students in the Wesleyan Training Institution, Westminster in 1856. London, Westminster Training College, 1869, PP.61-2.
- 18) Scott, J.; 'The Teacher's Best Qualification' Address to the Students in the Wesleyan

- Training Institution, Westminster in 1855. *ibid.*, P.31.
- 19) Scott, J.; 'Schools and Teachers' *op.cit.*, PP.63-5.
  - 20) Scott, J.; 'The Teacher's Best Qualification' *op.cit.*, P.34.
  - 21) Scott, J.; 'Schools and Teachers' *op.cit.*, P.57.
  - 22) *ibid.*, P.48-9
  - 23) Scott, J.; 'The Teacher's Best Qualification' *op.cit.*, P.31.
  - 24) Scott, J.; 'Schools and Teachers' *op.cit.*, P.71.
  - 25) Scott, J.; 'The Teacher's Best Qualification' *op.cit.*, PP.25-6.
  - 26) Scott, J.; 'Schools and Teachers' *op.cit.*, P.53
  - 27) *ibid.*, P.49.
  - 28) Scott, J.; 'The Teacher's Best Qualification' *op.cit.*, P.30.
  - 29) Scott, J.; 'Schools and Teachers' *op.cit.*, P.49.
  - 30) *ibid.*, PP.55-6.
  - 31) 上野耕三郎「英国勅任視学官報告書（1839-49）に見られる教育の理論-近代国民学校成立の一考察」教育史学会紀要『日本の教育史学』第23集，講談社，1980.10。
  - 32) Scott, J.; 'The Teacher's Best Qualification' *op.cit.* P.40
  - 33) Scott, J.; 'Preface' *op.cit.* p.VIII.
  - 34) Pritchard, F.C.,; *op.cit.*, P.17.
  - 35) *ibid.*, P.32.
  - 36) 三好信浩，前掲書，P.189。
  - 37) 同前書，PP.189-93。
  - 38) The Encyclopedia of World Methodism edited by Harmon, N., The United Methodist Publishing House, 1974, Vol. I, PP.2111-2.